

所持金103円 42歳非正規女性の「貧困」

「気がつく、所持金は103円でした。出勤する電車賃もなくなっていました。短大卒業後、非正規雇用で働いてきた女性(42)は突然、自分とは関係ないと思っていた「リアルな貧困」に直面した。給料が安くて仕事も絶えずにやってくる。でも40代になるとバイトの面接すらなかなか呼ばれなくなっていました。東京都千代田区の聖イグナチオ教会で、年初に開催された「年越し大人食堂」で女性に出会った。「不許はるのみ」

自助といわれても

「これ見てください。笑いますよね」。女性はショルダーバッグから長財布を取り出した。小銭入れを開けて、100円玉と1円5枚をシャラシャラと揺らしてみせた。小さな水玉のワンピースにスポンで防寒した細い体。「1週間、カップ麺で食いつないでました」。乾いた声で笑った。

女性は地方の小都市で生まれ育ち、高校卒業後、短大進学のために上京。卒業後、都内で1人暮らしをしてきた。新型コロナウィルスの影響で10月に学生寮の清掃の仕事をした。失業後は1日3件、求人サイトで清

コロナ禍 失ったつながり



「年越し大人食堂」を訪れた女性—東京都千代田区の聖イグナチオ教会で1月3日、木許はるのみ撮影

掃や販売、物流など、業種を問わず、求人情報に応募してきた。計200件応募したうち、面接にたどりつけたのは20件以下だった。昨年暮れに電子機器を組み立てる軽作業の仕事が見つかった。貯金は底を突いていたが、友人から紹介されたライブハウスの仕事を手伝え、乗り換えられるはずだった。ところが、友人から「やっぱりいいわ」と断りのメールが入った。3日間、日当8000円のはずだった。あてにしていたバイト代の「損失」。奈落に落ちた気がした。短大卒業の時は就職水戸期で、正社員になれなかった。就職活動では「内定をあげるからホテルに行こう」と言う面接担当や会社の幹部に遭遇した。「本当にこんなこと言う人がいるんだ」とあきれたが、それが現実だった。「真面目に働きたい気持ちがあるんですけど、就職活動がうまくいっていきません。就職活動の準備は2019年秋から始めた。新型コロナの流行以降、入寮者は半減した。非正規が真っ先に切られた。女性は職場の人間関係に悩んでおり、自らも退職の意思を伝えてしまったため「自己都合退職」とされた。

失業手当は、会社都合による退職なら申請から1週間支給されるが、自己都合退職では約2カ月後。すぐに仕事が見つかると思いきや、申請はせずに就職活動

「年越し大人食堂」では、温かい手作りの弁当が提供された。東京都千代田区の聖イグナチオ教会で1月1日、木許はるのみ撮影



「現時は30代前半でしたから。今はこの年齢で未経験の職種は厳しいですね。『厳正に審査した結果……』ってお祈りメール(不採用通知)がたたくさま来ました」。新型コロナ前、女性の収入は月16万円。日常生活で困ることはなかったが、非正規なので、もともと余裕がなく、貯金は6万円ほどだった。女性は失業後、1月下旬には貯金を取り崩さないと生活が成り立たなくなりました。元同僚に教えてもらった新型コロナによる困窮者向けの公的融資「緊急小口資金」を思い出し、区役所を訪れた。

「収入が減少した世帯を対象に、20万円を上限に無利子で貸し付ける制度だ。厚生労働省は従来、融資に所得制限を設けていたが、コロナ禍に柔軟に対応するため、制度を拡充していた。厚生労働省は、非正規や個人事業主をはじめ、生活に困窮した方のセーフティネットを強化する」と制度を紹介している。本来、雇用を失った女性の受け皿になるはずだ。区役所の待合用の椅子はほぼ埋まり、女性は20分待つと相談することができた。しかし、窓口の職員と話したのはわずか5分。職場で人員削減があった」と伝えても「1000円コロナの影響がどうかわからない」と職員に言われた。

「私も対象にならないんだ」。他の制度を自力で探す気にもなれなくなっていた。隣の窓口からは「家を追い出されそう」という男性の声が聞こえてきた。「私より深刻な人がいる」と自分に言い聞かせて区役所を後にした。

また、2週間後にバイト代が入ると伝えると、職員から「もう働いてるんですよね。あと2週間なら何とかして下さい」と「もっと大変な人がいます」と突き放されてしまった。何とか説明しようとしていたら、別の職員が近づき「まだ何か? 次の人とどうぞ」と席を立つようせよされた。

「友も家族も頼れず」女性は周囲に生活困窮を打ち明けることができなかった。生活費を節約するため、友人からカフェに誘われても行けなかつた。

「お金がない」とは言えず「忙しいから」「作業があるから」と言い訳をした。「友達だから相談できないんです。重たい話をしたら引かれるかもしれない。友達を失うのが怖かった。奥家の家族にも話ができなかった。生活保護の申請も考えていない。申請をして、万が一実家に連絡が行ったら、父親から罵詈雑言を浴びせられます。絶対に嫌です。迷った揚げ句、空腹に耐えかねてネットを知った大人食堂に足を運んだのだ。」「私は水戸期なので、クレパス(深い割れ目)に落ちたんです」相談支援をしている作家の兩宮優美さんは「女性のように年収が200万円以下の場合、貯金をする余裕はありません。でも社会人のはじめから非正規でその生活に慣れている場合、自分が貧困だと気付いていないケースがあります。非正規の間でこうした認識が広がっているのが日本の現状なんです」と話す。その後、女性は給料を受け取って、その足でコンビニでガスを代を払い、シャンプーやせっけんを買った。ガスが止まってからは電気ポットで水を温めて風呂で使っていた。「これで髪がサラサラになりそうです。シャワーのお湯で髪が洗えます」。戻ってこないものがあった。疎遠になった人間関係だった。秋以降はお金がなく、友人からの誘いに乗れず、連絡を控えていた。「貧困は人とのつながりも壊してしまうんだ。そう痛感しました。ちゃんと生活を立て直して、新しい人間関係を築いていきたいです」 〓おわり